

# 世界に羽ばたく「薬都とやま」の実現に向けて

## ～人材確保の観点から～

(一社)富山県薬業連合会 専務理事 高田 吉弘

「富山といえば薬」と全国に知られ、多くの国民から「くすりの富山」と認知されているのは、三百年以上前の元禄年間から「先用後利」という精神に基づき行われてきた配置販売によるものである。江戸時代から始まったこの商法は、特に配置従事者の教育に力を入れ、何よりも消費者の信頼を最優先してきたことが、今日の名声に繋がってきたものと考えている。

現在でも富山県においては、医薬品産業が製品出荷額で県内第一位、従業員数でも第二位となっており、主要産業の一つとなっている。また、本県の医薬品生産額は、平成26年においては6,163億円と全国第二位となっており、いずれ第一位になるものと期待されている。

その要因としては、委受託生産の増加のほか、国におけるジェネリック医薬品の利用促進策の推進や新製品の開発が挙げられている。県内製薬企業では医薬品開発の研究施設や高薬理活性の製造施設等への設備投資が、今後も900億円以上予定されているが、いずれ新しく設置・整備された施設等で活躍する人材確保が大きな課題になってくるものと考えている。

なお、医薬品は効能効果とリスクを併せ持つという一般の商品にない特殊性を有するがゆえ、関係法令により多くの規制が行われており、特に、各製造施設等に設置が義務付けられている総括製造販売責任者や製造管理者の役割を担う薬剤師の確保が重要なポイントになると思われる。しかし、最近富山県出身者の薬剤師合格者数が低迷している状況にある。

こうしたことから、富山県においては、中高生を対象とした「薬剤師のお仕事」体験学習事業等を行い、薬学部進学者の増加を目指しており、当会でも、合同企業説明会の開催や薬学部生を対象としたインターンシップ事業等を行ってきている。

医薬品業界を取り巻く環境は、日々大きく変化してきているが、本県医薬品産業においても、環境の変化に対応して、色々な取り組みが進められていくことが予想される。そうした新たな動きに対応するためには、若い優れた人材が不可欠であり、本県医薬品産業が持続的発展を図っていくために求められる人材について、私見を述べさせていただきます。

## 【略歴】

昭和51年3月	名城大学薬学部 卒業
昭和51年5月	富山県採用
昭和60年10月	厚生部薬務課主任
平成4年4月	氷見保健所保健予防課予防係長
平成5年4月	上市保健所保健予防課予防係長
平成7年4月	厚生部健康課がん成人病係長
平成10年4月	厚生部医務課副主幹
平成12年4月	厚生部薬務食品課課長補佐
平成14年4月	中部厚生センター八尾支所衛生予防課長
平成15年4月	厚生部厚生企画課主幹(中部厚生センター八尾支所衛生予防課長事務取扱)
平成17年4月	厚生部くすり政策課振興開発班長
平成21年4月	厚生部くすり政策課長
平成22年4月	衛生研究所次長
平成25年3月	富山県退職
平成25年4月	一般社団法人 富山県薬業連合会 専務理事